

何か☆お料理なび

「うん、何だろう、コレ」

御影さくらは、自分の所に届いた一通のメールを見て、思わず戸惑いの声を漏らしていた。

「ここは、御影さくらの部屋である。」

先程まではデスクトップに立っていた彼女だったが、一仕事終えて、自室に戻り、今はベッドに腰掛けながら、メールを手チェックしていたのだった。

「さくら、どうしたんや?」

御影さくらの戸惑いの様子になったのか、床に座っていたうにゆうが声を掛ける。

「何か、変なメールが来てるんだよ」

「変なメールって、出会い系とかのスパムか? ヒマにまかせて、いろんな掲示板に怪しげな書き込みばかりしてるからやぞ」

「そんな事しないよっ!」

あんまりといえば、あんまりのツッコミに、御影さくらが声を荒げる。

「だったら、何なんや?」

「何と言つか、まあ見てみてよ」

御影さくらが、目の前に展開したウィンドウを指差した。ウィンドウには、御影さくら宛に届いたメールの一覧が表示されている。

「むねむね」

うにゆうが御影さくらの指差した箇所を覗き込む。そのメールのタイトルは、以下のようなものだった。

『デフォルトゴーストの座、争奪戦へのお誘い』

うにゆうは無言で御影さくらの方へ向き直ったが、御影さくらは戸惑いの表情のまま、小首を傾げるだけである。

「ウィルスも仕込まれていないみたいだし、本文を見てみようか」

そう言うと、御影さくらは目の前の何も無い空間に向けてタイピングを始めた。彼女がタイピングする度に、まるで見えないキーボードがあるかのように、空間が光り輝く。

御影さくらに限らず、大半のゴーストは、何も無い空間を出入力デバイスに変える能力を持っている。先程の空間に浮かんだウィンドウもその応用である。

ほどなく、メールの本文がウィンドウに表示された。

さくら様へ

この度、デフォルトゴーストの座を賭けた争奪戦を開催する事になりました。

当日は、下記アドレスが示す場所へお集まり頂けます様、お願い致します。

なお、未参加の場合には、その権利を放棄したものとみなします。

ミスターXより

「……………」

唐突過ぎる内容に、本文を読み終えた御影さくらとうにゆうは、啞然としていた。

「どこからツッコんでええのか……。今時、『ミスターX』はないやろ」

とうにゆうのツッコミに、御影さくらが笑みを漏らす。

「あはは、そうだね。しかも、メールの差出人欄を見ると、『しっかり』ねここ『って書いてあるや」

「何や、ねここの仕業か。しかし、どういってもりなんやろな」

ふと、ウィンドウに目を向けた御影さくらが、困ったような苦笑いを浮かべる。

「別に、デフォルトゴーストである事にこだわるつもりもないんだけどね」

とうにゆうにすら聞かえない小さな声で、御影さくらは呟いた。彼女の表情に、ほんの少々の憂いが秘められているのを感じ取るのは、気のせいだろうか？

「ん、どうしたんや、ねここ」

「うん、何でもないよ」

うにゆうの呼びかけに対し、御影さへらはいつもの笑顔に戻ると、明るく言葉を返した。

「で、『争奪戦』とやらに参加するんか？」

「もちろん出るよ。何か面白そうだしね」

「やけにあっさり決めだな。少しは疑うかとも思ったんやけどな」

そうは言いつつも、うにゆうもまんざらでもないように見える。実のところ、御影さへらもうにゆうも、単にハマってたのである。

「で、その『争奪戦』とやらは、いつ始まるんだろうね？」

御影さへらは、ぼすん…とベッドに横になった。どうやら、眠くなってきたらしい。

「そういえば、本文には書いてへんかったな」

うにゆうが何気なくウィンドウを操作し、先程のメールを読み直す。そうしてメールを見ているうちに、うにゆうは先程見逃した記述がある事に気が付いた。

「明日やて」

「何が…」

ベッドに横になり、半分寝かかっていた御影さへらが、夢見心地といった感じで聞き返した。

「だから、『争奪戦』とやらは、明日開催のさ？」

「え、明日っ！」

あまりのサブライズに、思わず御影さへらが飛び起きた。

「メールの一番最後のほうに明日って書いてあるで」

うにゆうが指差すウィンドウを、ベッドから起き上がった御影さへらが覗き込んだ。

「ホントだ、気が付かなかった…って、メール本文に思いつきの『明日』って書いてあるじゃない！」

「送信日が今日になっとなるから、やっぱり明日なんやろ」

「普通は日付を書くよね…。まあ、ねこらしいというか、何と言っか…」